

CBR マトリックスを活用した 地域福祉活動分析に関する一考察

—日本の A 事業所の取り組みと B さんの生活を事例に—

杉 野 寿 子

Assessing CBR MATRIX in Community Development:
A Case Study of NPO and its Participant's Life in Japan

Hisako SUGINO

【要 旨】

開発途上国を中心に障害者の社会参加アプローチとして注目されてきた CBR（地域に根ざしたりハビリテーション）は、さまざまな議論や実践を展開しながら変遷し、2010年に WHO（世界保健機構）から CBR ガイドラインが発表された。本研究では、このガイドラインで示されている重要構成要素（5 領域 5 項目）を視覚的に表示している CBR マトリックスを活用し、日本の A 事業所の地域福祉活動分析と A さんの生活分析を行い、その考察を行った。開発途上国だけでなく、日本においても地域社会すべての人が地域参加し発展していくことをめざしていくことに変わりない。CBR の手法を日本に合った形で取り入れ、CBR マトリックスを活用しながら地域分析や活動分析、また生活分析することは、今後の日本の地域福祉促進の一助となり得ることを示唆した。

【キーワード】

CBR CBR マトリックス 地域社会開発 地域福祉活動分析 生活分析

1. はじめに

「地域に根ざしたりハビリテーション」、「地域社会に基盤を置いたりハビリテーション」などと訳される CBR（Community-Based Rehabilitation）は、1970年代後半より、WHO（世界保健機構）をはじめ国連機関や NGO（非政府機関）などにより取り上げられ、主に開発途

上国を中心に障害者の社会参加におけるアプローチとして注目されてきた。障害のある人、その家族、そして地域に住むすべての人々が地域社会への参加意識を高め、権利を享受できるよう社会変革していく地域社会開発の戦略として、その概念や実践は、発展しながらアジア太平洋、アフリカ、中東、中南米など各地に広がってきた。

しかし、CBR の概念や実践は地域社会開発

の考えが基本となっているにもかかわらず、その実践が医療モデルから脱せず、専門家主導で行っているものを CBR としているものも少なくなかった。筆者が以前調査研究したヨルダンの CBR も、関係者は試行錯誤しながら実践していたものの、本来の CBR の概念の浸透が難しく、医療モデルの域を脱していない傾向にあった。そのような例はヨルダンだけでなく、世界各地でみられていた。そして、さまざまな変遷の後、2010年に WHO から CBR ガイドラインが正式に発表された。

この CBR ガイドラインは、人間の生活と個人の尊重について、そしてそれらを築き上げていくための地域社会開発の指針について、とても丁寧に作成されている。また、それを簡潔に視覚的に表示された CBR マトリックスは、とても理解しやすく、さまざまな場所や対象で活用されることが期待される。これは、開発途上国の地域開発のためだけに限定するのではなく、ほかの国々の地域社会でも地域開発および人間開発の充実をさらに追求するための指針として、応用できるであろう。高嶺は、CBR マトリックスを用いてインドの自助グループのプ

ログラム分析を行い、この手法は日本の地域福祉活動を分析するのにも十分役立つとしている¹⁾。

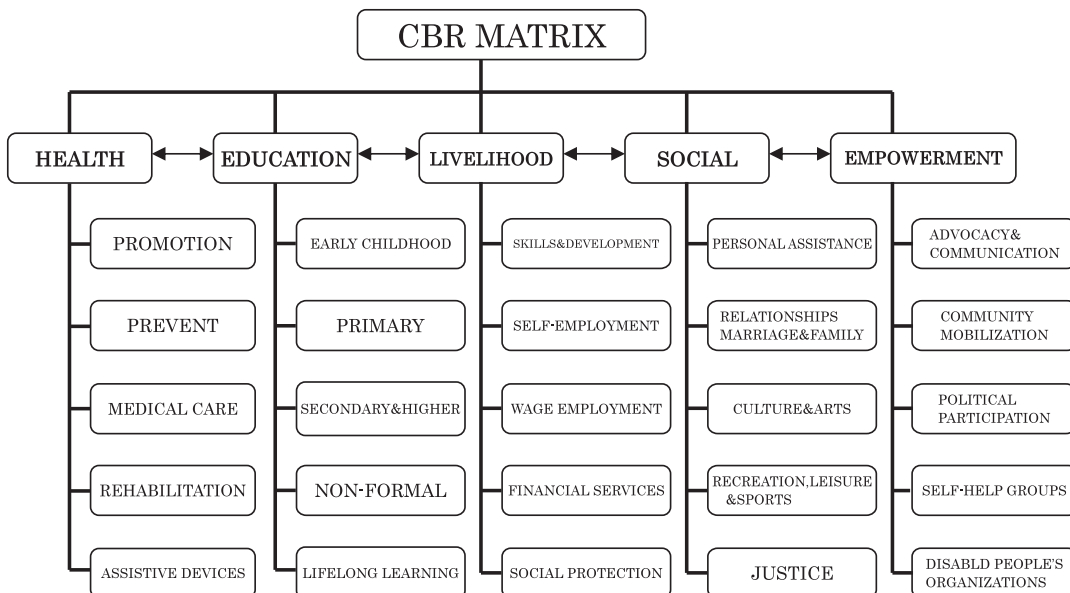
そして、地域全体の分析だけでなく、地域の中にある事業所や団体の活動、地域の中に住む個人の生活充足度についても分析する際に有効な方法として活用できよう。実際に、日本障害者リハビリテーション協会を中心に、CBR マトリックスを使用した CBR 研修も各地で開催されており、その研修で団体の活動や個人の生活充足度についての応用も紹介されている。しかし、まだ日本の地域福祉活動について CBR マトリックスを使用した具体的な分析例はほとんどない。

本研究では、CBR マトリックスを活用し、日本の地域福祉活動と個人の生活を分析し、日本における CBR マトリックスの活用について考察していく。

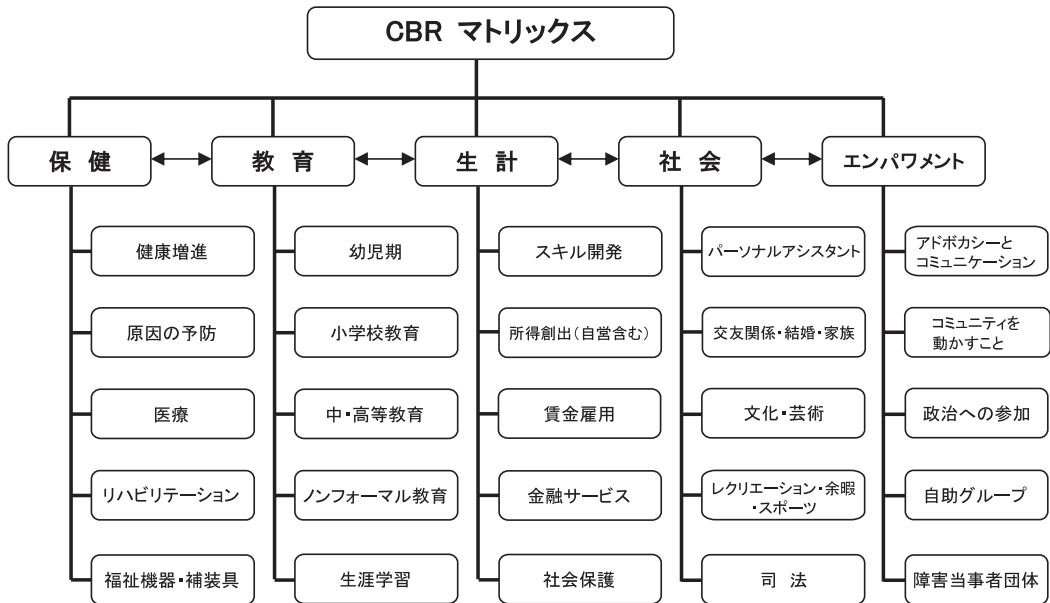
2. CBR ガイドラインと CBR マトリックス

CBR の定義や目的について示されている「CBR 合同政策指針」は、WHO が ILO (国

【図1】 CBR マトリックス (英語版)⁴⁾



【図2】 CBR マトリックス (日本語版)⁴⁾



※日本障害者リハビリテーション協会訳

際労働機関) および UNESCO (国連教育科学文化機関) と共同で1994年に作成した後、障害者が社会へ参加するレベルではなく、積極的な貢献者になることなどを加え、2004年に改訂され、2010年に CBR ガイドラインが発表された²⁾。以下、上野²⁾による CBR ガイドラインの主な目的について紹介する。

- ・ CBR プログラムが CBR 合同政策方針と障害者権利条約に沿って実施されるためのガイドランスである。CBR ガイドラインの原則には、障害者権利条約の一般原則が使われている。
- ・ CBR はコミュニティにおけるインクルーシブ開発 (CBID) を促進することで、それは障害を開発に主流化することである。特に貧困削減を推進するものである。

CBR ガイドラインは、全7部で構成されており、第1部「導入」、第2部「健康」、第3部「教育」、第4部「生計」、第5部「社会」第6部「エンパワメント」、第7部「補足」のテーマで書かれている。第2部から第6部のテーマが5つの領域として示され、領域ごとに5つの項目に分かれており、その内容について具体的

に説明されている。5つの領域は相互に作用されていることも強調されている³⁾。

CBR マトリックスは、上記5領域およびその領域から分かれた5項目について、視覚的に図式化されたもので⁴⁾、CBR の全体像が理解されやすくなっている。CBR マトリックスの英語版と日本語版が、それぞれ【図1】と【図2】である。

3. CBR マトリックス活用による NPO 法人 A 事業所の活動分析

(1) A 事業所の概要

X 県南部 Y 市にある NPO 法人 A 事業所は、1996年に任意団体として、障害のある子どもの就学 (進路) や将来についての悩みを会員相互に相談し合う活動を始め、講演会や映画上映会などを催しながら、障害者が地域で安心して暮らせるための啓発活動を続けてきた。2002年に NPO 法人を設立し、児童デイサービス (児童発達支援事業)、放課後児童クラブ (放課後児童健全育成事業)、児童館事業を開始した。

その後、2005年に障害者地域生活援助事業（グループホーム）の運営、2011年には地域活動支援センター（以下、地活センター）の運営を開始した。地活センターでは、障害の種別や区分に関係なく利用者の特性に合わせた作業や創作活動を通して、利用者の望む生活に必要とされる力を養成するためのプログラムを実施している。就学時の放課後学習支援の利用も受け入れている。

地活センターと同じ建物では、飲食店(K店)の運営もしており、ランチタイムには定食や手作り弁当の販売、夕方以降は居酒屋風創作料理を提供し、地域住民から幅広く利用されている。このK店では、地活センターで製作しているお菓子や小物、プリザーブドフラワーなどを販売することで、K店利用客と地活センターとのつながりが生じ、地域の方々が地活センターに関心を持ち訪ねてくるケースもある。もちろん、地活センター利用者がK店で作業を行うなどしながら、客との交流もっている。また、地活センターの地域住民向け利用も進めている。地域住民が気軽に立ち寄り、お互いの理解を深めるねらいで、文化教室を開いている。特に、週1回夜7時から開講しているヨガ教室は、ヨガを楽しんでもらうだけでなく、レッスン後にはK店で夕食を提供している。この夕食は、K店の栄養士がヨガ受講者向けにヘルシーメニューの献立を作っている。ヨガ受講者にとっては、安価な受講料（夕食込み）で身体の内外から健康になると評判である。ヨガ教室の開講は、もともと地域住民の理解を目的としていたものだったが、次第に地域住民の健康増進という保健分野の社会貢献的意義もみられるようになってきた。

A事業所は、地域とのつながりを重視しているため、独自の事業運営だけでなく活動もさまざま行っているが、その一つに毎年実施している「福祉フォーラム」がある。このフォーラムは、誰もが安心して地域で暮らしていけるようにという願いから、X県内各地区(ブロック)で11年前から行われているが、ブロックによっては他のブロックと統廃合したりなど、フォー

ラムの内容や運営に行き詰まりが生じているところもあるのが現状である。しかし、Y市のフォーラムは、一人でも多く地域の中の理解者を増やしていくきっかけ作りとして、フォーラムを継続している。A事業所もこれに関わり、企画・運営を地域の有志を募りながら実施している。当初フォーラム運営関係者は、行政や福祉事業所のスタッフだけだったのが、現在は一般住民、障害当事者や家族もメンバーに入り、多くの要望や意見を取り入れながら、派手ではないが地域の中での輪づくりを広げる活動として地道に取り組んでいる。また、直接企画には関わっていないものの、市内の民生委員や区長が積極的に協力し、毎年フォーラムへの参加を楽しみにし、居住地区の住民にフォーラムへの参加を呼びかけている。民生委員や区長は地域福祉においてキーパーソンとなるが、Y市では、着実に望ましい方向となっているといえる。これは、日頃からのY市社会福祉協議会と住民（特に民生委員と区長）、Y市社会福祉協議会とA事業所、A事業所と住民との関係性が大変良好であることが要因ともなっている。

このフォーラム運営をきっかけに、誰でも参加可能な地域福祉を考える会(N会)ができ、3年ほど前から月に一回程度の頻度で集会が続けられている。重度身体障害のある方、知的障害のある方、視覚障害のある方など、誰もが会に参加し、安心な生活を送るためのアイデアを出しあったり、ソーシャルアクションにつながる行動を行ったりしている。N会はインフォーマルな会であり、A事業所のメンバー(利用者、職員)も参加し、一人ひとりの思いをお互いに表明しながら地域社会のニーズを発見し社会を開発していくことにつなげている。

このように、A事業所の取り組みは、日本の地域のなかでCBRを実践しているといえよう。

(2) CBRマトリックスによる活動分析

前述のA事業所の取り組みを、CBRマトリックスの5領域〔保健、教育、生計、社会、

エンパワメント]に当てはめ、活動分析してみたい。分析にあたっては、筆者自身がこれまでA事業所に頻繁に通い、事業所利用者やスタッフとの交流のもと、複数のコメントを集約して行ったものであるが、その際A事業所のスタッフにCBRマトリックスを提示し、自己分析していただいたものも含まれている。【図3】のCBRマトリックスの項目の背景が塗りつぶされている箇所が、A事業所が現在活動しているものである。

1) 保健

ほぼ全項目に当てはまる活動が行われている。「健康増進」では、児童館利用の乳幼児とその家族、児童発達支援事業利用の障害児とその家族をはじめ、地域住民の健康生活を維持していく取り組みが行われている。前述の、K店での栄養士による献立弁当やヨガ教室での夕食提供などが具体例で、そのほかグループホーム入居者の栄養管理も栄養士が行っている。「原因の予防」、「リハビリテーション」については、保健所や市役所等行政や医療機関、各種機関と協力した疾病や障害の早期支援を行っている。障害の種別や状態に応じたりハビリテーションの実施や他機関への紹介をし、「福祉機器・補装具」が必要な人には紹介や情報提供も行っている。また、歯科治療については、児童発達支援事業の取り組みとして、地域の歯科医との協力を長年にわたり継続しながら、小さな子どもや障害のある子どもが歯医者嫌いにならないよう、治療の必要のない子どもも含めて「歯医者さん通い」の時間を設けている。

この領域では、ほぼ全項目で該当するが、保健所や医療機関との連携が欠かせず、ネットワークを通じた活動の重要性が確認できた。

2) 教育

児童発達支援事業での保育や幼児期教育の実施のほか、小・中学校への特別支援教育支援員の派遣をY市から委託され実施している。ノンフォーマル教育は放課後児童健全育成事業や児童発達支援事業での放課後支援、

地活センターでの学習支援を日常的に実施している。生涯教育については、A事業所利用者に限らず一般の地域住民に対する講演会等の開催を行っている。この領域でもすべての項目で該当するが、「小学校教育」および「中・高等教育」については、学校運営をしているわけではなく、公立学校への支援員派遣を実施していることで該当とした。児童発達支援事業や放課後児童クラブを運営しているA事業所にとって、教育に関して地域の学校と連携をとることは不可欠なことである。

3) 生計

この領域では、「所得創出（自営含む）」と「金融サービス」は実施していないが、地域住民への情報提供や相談に応じるなどしている。「スキル開発」は、主に地活センターやグループホームで提供しており、「社会保護」は、グループホームの運営と入居者への支援がそれにあたる。「賃金雇用」は職員を雇用しているという観点だけでなく、障害者の就労支援や雇用促進に取り組んでいる。障害者就労支援の受け入れも行い、障害者雇用も実際に行っている。障害者とその家族が、親なき後の生活について不安に感じている点はこの領域と深く関連するといえる。A事業所ではこの領域の活動をさらに進めていく予定であることも確認できた。

4) 社会

「パーソナル・アシスタント」、「交友関係・結婚・家族」、「芸術・文化」、「レクリエーション・レジャー・スポーツ」、「司法」のいずれの項目も、個別に対応しながら支援し、協力者を募りながら実現していけるよう取り組んでいる。この領域については、他の領域よりもさらにインフォーマルな人やネットワークが必要となる。そこで、あらゆる「しかけ」を模索しながら地域の中の協力者を増やしていくことを続けている。その「しかけ」とは、例えば、前述の福祉フォーラム、N会、利用者同士の交流、保護者間交流、地域行事への参加、近隣大学のイベントへの参

加などが挙げられる。実際にこれまでも、これらがきっかけとなり、介助ボランティアが集まったり、その後個人的な付き合いに発展したりなどの例がある。最初の協力者が地域の理解者となり、その理解者が協力者を増やしていくという実践例がある。

5) エンパワメント

この領域はCBRの核ともなる重要な要素が織り込まれている。「障害当事者団体」については、A事業所ではその組織は結成されていない。「コミュニティを動かすこと」、「自助グループ」は、「N会」の開催や障害児の保護者会等により実施されている。「政治への参加」は、法制度の立案・改正等に向けた運動を行っていることで該当とした。

以上、CBRマトリックスを用いたA事業所の活動分析を行ったが、25項目（5領域×5項目）のうち、22項目について該当し、活動を行っていることが分かった。

4. CBRマトリックス活用によるBさんの生活分析

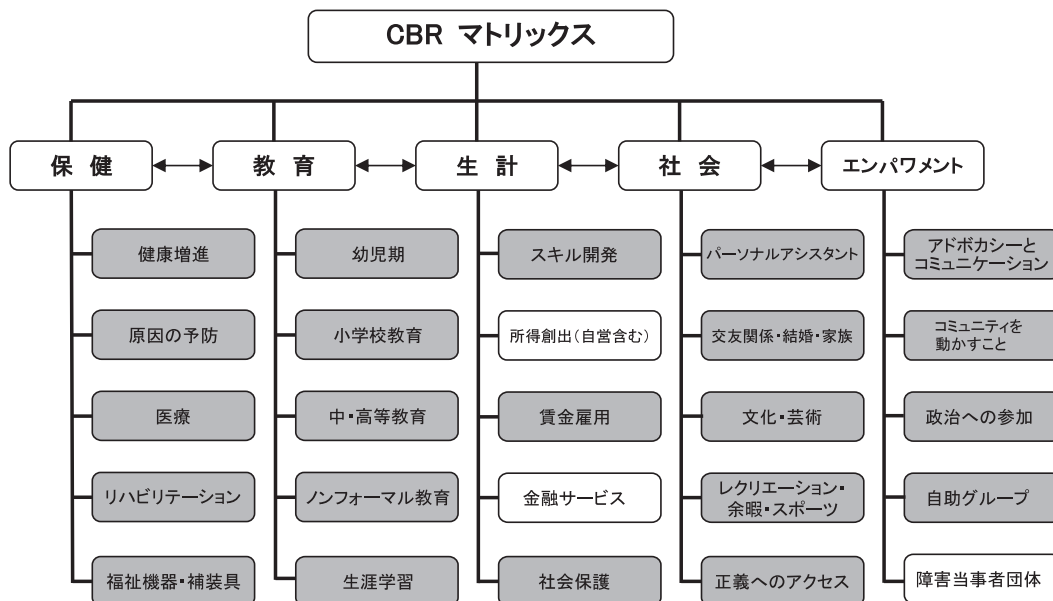
(1) Bさんについて

Bさんは、X県Y市在住の女性で、29歳。知的障害があり、A事業所のグループホームで生活している。グループホームはアパート式で、50代の女性とルームシェアをしている。中学校卒業までは、地域の普通学校に通学。中学校では特別支援学級で授業を受けることもあった。中学卒業後は、養護学校（現支援学校）高等部に進んだ。卒業後、Y市内の障害者支援施設へ通い、現在はその施設で就労移行支援制度を利用している。

(2) CBRマトリックスによる生活分析

今回の生活分析について、BさんにCBRマトリックスを提示しながら説明し、Bさんの生活について情報提供していただくこと、また本研究に協力していただき、匿名で公表されることについて承諾を得た。2013年9月にインタビュー調査を行い、その際、筆者だけでなくB

【図3】 CBRマトリックスによるA事業所の活動分析



さんとともに分析を行ってみた。以下、CBRマトリックスの領域に沿って、インタビューし分析した結果を述べる。【図4】のCBRマトリックスの項目の背景が塗りつぶされている箇所が、Bさんの生活で該当し充足しているものである。

1) 保健

通所利用している支援施設で、年1回の定期健康診断は受けており、日頃から数値が高めになっている血圧については、自分で測定している。女性特有のがん検診は受けたことがないため受診してみたいとのこと。医療機関での受診は必要に応じて通院している。A事業所地活センターのヨガ教室に通い、健康維持に努めている。よって、「健康増進」、「原因の予防」、「医療」については整った環境にあるものの、減量の必要性もあることから、今後さらに留意していく必要がある。「リハビリテーション」および「福祉機器・補装具」については、今のところ該当なし。

2) 教育

幼少時から学校教育を受けており、現在は通所施設で学習する機会もあるほか、N会や福祉フォーラムへの参加などを通じて、積極的に生涯学習の機会を得ている。この領域はすべて該当している。

3) 生計

通所支援施設での作業と、近隣の幼稚園での清掃業務とで賃金を得ているものの、それらの賃金で生計が成り立っているとはいえない。「所得創出」、「賃金雇用」には該当していないと判断する。今後は一般雇用の環境で就職したいと強く希望しており、その準備も進めているとのこと。「金融サービス」については、日常の買い物程度以外の金銭管理は自分以外の人に任せている。貯蓄についての知識などがあまりないため、金融サービスを受けているという認識は本人にはないが、金銭管理を任せている人に貯蓄も頼んでおり、少しずつ貯めることができていく。自分以外の信頼できる人に委任する形で貯蓄管理をしているとのこと、この項目は該当とした。

「社会的保護」については、将来一般住宅で暮らしたいという希望をもちながらグループホームの制度を利用して地域のなかで生活している点、障害年金を受給している点などから、該当していると判断する。

4) 社会

「パーソナル・アシスタント」は、主にグループホーム世話人や通所支援施設の職員から支援を受けている。多様なニーズはあるものの、しばしば誰に相談してよいのか迷うこともあるという。そんな戸惑いも含めて世話人や施設職員に相談するとのこと。身の回りのこと(ADL)は自立しているものの、悩みや問題を抱えたときの対処が不安なことはあるという。「交友関係・結婚・家族」については、少数の友人と連絡を取り合い、家族との交流も密にあり、恋愛も概ね楽しむことができている。ただ、本人は十分に満足しているわけではなく、もっと交友をもちたいと願っている。「文化・芸術」については、好きな音楽やテレビを鑑賞するなど、自分の価値観に合ったものを選択しながら楽しんでいるように思われるものの、文化・芸術に関する情報をもっとほしいという要望もある。例えば、映画やコンサートも行きたいという気持ちもあるため、その情報があればもっと楽しみも増えるかもしれないとのこと。「レクリエーション・余暇・スポーツ」は、通所施設での活動や、ヨガ教室への参加などで機会を得ている。「司法」については、もしも司法へのアクセスが必要な場合には、家族やグループホーム関係者がその支援をしてくれると判断する。この領域については、完全な充足には至っていない部分もあるが、概ねすべての項目において、該当している。

5) エンパワメント

「アドボカシーとコミュニケーション」については、自分の思いや考えを他者に伝えることは概ねできていると評価できる。本インタビューにおいても、自らの気持ちを率直に伝えることができたとしている。「コミュニティを動かすこと」では、Bさん自身は地域

や周囲を動かすことなどできていると認識していなかったが、BさんがN会で発言したことに対して、参加した他のメンバーが新たな気づきをもち障害理解につながったり、Bさんの存在が周囲の言動を変えたりしている事実を筆者自身が確認した場面が幾度かあった点から、Bさん本人が気づいていない力（周囲を動かす力→コミュニティを動かす力）がついているものと判断できる。「政治への参加」は、毎回の選挙には必ず投票に行っているという点から該当とした。投票に際しては、家族や周囲の人が候補者についての情報を提供してくれるとのこと。「自助グループ」は、N会や通所施設で該当するグループがあるが、「障害当事者団体」の結成には至っていない。

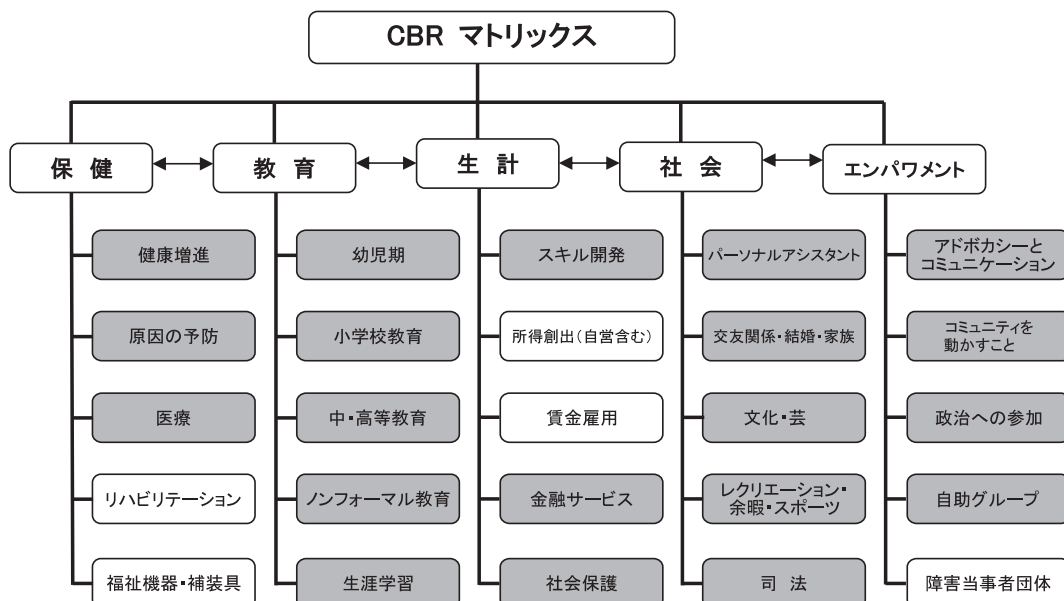
以上、Bさんの生活全般に関して、CBRマトリックスを用い分析を行い、25項目（5領域×5項目）のうち、20項目について該当していることが分かった。

5. 2事例の分析における考察とまとめ

2つの事例について分析を行ったが、改めてCBRガイドラインとCBRマトリックスがいかにより地域社会と人間の関連を重視し、地域社会や個人の豊かさを追求するための具体的な指針であるかということに気づかされる。

日本国内で地域福祉実践をしている団体は多くあるが、それぞれに自らの実践をどのように振り返っているのだろうか。多くの地域福祉活動を行っている団体は、地域のニーズを把握したのち事業を開始し、自らの活動に懸命に取り組む、そのプロセスの中で得た新たなニーズに対応した実践も組み入れながら積み重ねていっていることであろう。その際にはもちろん関係機関とのつながりも重視しながら、時にはエコマップ等を作成・活用しながら幅広い活動を試みているものと思われる。その際、自身の活動をモニタリング・評価し、次の展開を考え捉える方法として、CBRマトリックスは大いに活用できるであろうことを、今回の分析によって確認できた。

【図4】 CBRマトリックスによるBさんの生活分析



A事業所の代表スタッフからは、今回の分析を通じて以下のような感想があった。

- ・ CBRマトリックスの各領域と項目は、社会と個人の全体をよく捉え、重要事項を的確に集約されている。
- ・ CBRの基本指針が常に社会モデルで徹底されていることに、強く感激し、影響を受けた。
- ・ 各項目は普段からよく使う用語ばかりだが、マトリックスとして並べるとその重要さを実感できる。
- ・ CBRマトリックスは、わかりやすい。簡単なのに重要要素が詰まっている。
- ・ ガイドラインの内容を見ると、日本には馴染めないものもあるため、どのように評価してよいのか迷うこともあった。
- ・ 実際に行っている日頃の実践について、評価・分析するためのツールとして活用できそうだ。
- ・ 改めて、現在行っている活動を見直すことができ、地域の中の資源に気づいたり、必要な社会資源が見えてきたりした。

このような意見からも、CBRマトリックスは日本の地域福祉活動の実践において非常に参考になり、活用できると期待できる。ただ、最後の感想の中にもあるように、もっと使いやすいものにしたほうがよい点もある。

次に、Bさんの生活分析から見えてきたものは、以下の点である。

- ・ BさんにCBRマトリックスを見てもらいながら質問に答えてもらったが、各項目の用語がBさんにとっては理解の難しいものがあったため、Bさんが理解しやすいことばを使った表示と説明が必要だった。
- ・ 全25項目について一つひとつ質問し、答えてもらったため、Bさんを疲れさせてしまったのではないかと心配したが、本人にとっては、この25項目を質問してくれたおかげで、自分のことが少し分かり、面白さを感じたという感想があった。
- ・ 筆者はこれまでBさんと関わりをもっていたが、各項目について質問してみると、これ

まで知らなかった彼女の情報を知ることになったため、第三者が生活分析する場合には、守秘義務のもと、正しい倫理観をもつことが重要である。

- ・ Bさんの生活環境に沿ったマトリックスであれば、もっと使いやすかったかもしれない。
- ・ Bさん自身で分析できるものであれば、なおよい。
- ・ 今回のインタビューを通して、日頃表明していなかった気持ちや要望について発言することができたようだ。

Bさんにとっては、改めて自分自身のことや生活について見直すきっかけとなったようであり、もっと自分で意思表明してもよいのだということも気づいたようである。このことは、これからBさんが自分らしい生活を送っていくことにとって、とても重要なことであり、CBRマトリックスを個人の生活に当てはめて分析することの意義にもつながると思われる。ただ、今後活用する場合には、いくつかの課題もあるといえる。

CBRは開発途上国の障害者支援のアプローチとして誕生し、開発されてきたため、日本などプライマリ・ヘルス等ベーシックヒューマンニーズ(BHN)がある程度整った国においては、CBRガイドライン及びCBRマトリックスの項目によっては、充足していることが当然なものもある。そのため、その国や地域の実際の現状と照らし合わせた場合、活用しづらい点もあるかもしれない。その場合には、その国や地域などの状況により項目を変更し、応用していくこともできるであろう。また、同じ国の中でも、その対象を地域全体とするか、事業所とするか、また個人の生活とするのかによって、項目を変更・追加しながら活用されよう。

今回、日本国内のA事業所の地域福祉活動とBさんの生活について、既存のWHO版のCBRマトリックスでの5領域5項目をそのまま使用し分析したが、今後はA事業所やBさんの現状にあったCBRマトリックスを開発し、それを活用すれば、より評価や分析がしやすいものと考えられる。いずれにしても、今回

の活動分析および生活分析は、CBR マトリックスを使うことにより、A 事業所は地域活動を見直し、他機関等とのつながりを確認でき、さらに不足している社会資源などにも気づくことができた。また、【図3】で色づけしていない部分については、地域の中 he 機関が担っていたり、連携を強めていったりなどで充実を図っていきけることも分かった。B さんについては、現在自分自身が地域へ参加していることに気づくことができたが、今後必要に応じてサポートを受けながら、B さん自身で項目を考え、確認や分析することで、自身で生活のあり方を決め、自ら QOL を高めていく好機となるであろう。今後、両者のマトリックス開発を検討してみたい。さらに、今回は A 事業所と A さんが居住する Y 市の地域分析をするには至っていないため、今後分析する機会を得たいと考える。

さて、多くの開発途上国では、政治経済力の脆弱さから資金面の不足、ハード・ソフト双方の不足から、障害者に関するフォーマルな制度や支援はごくわずかである。したがって、インフォーマルなサービスやパワーを活用することが不可欠となる。もちろん、日本など先進国といわれる国においても、自分らしい生活を送るには、フォーマルな支援だけで実現できるものではなく、インフォーマルなつながりや支援があつてこそ充足するものである。CBR マトリックスで見ると、どの国や地域においても、左の領域（健康）ほどフォーマルサービスの割合が高く、右の領域（社会、エンパワメント）ほどインフォーマルサービスの割合が高くなることに気づく。言い換えれば、先進国といわれる国ほど、左側はフォーマルサービスで当然充足していることが多い。これは、左方向の領域ほど BHN の高いものだからである。しかし、人間の精神的な充足度については、右方向の項目がどれだけ充足しているかに左右されるのではないか。だからゆえ、右方向の領域でのインフォーマルな取り組み、資源の開発が重要となってくる。

福祉実践において、地域住民のパワーを生か

すことが求められているが、今後、日本の地域社会において、具体的なインフォーマルな活動がさらに増え、すべての住民が社会に参加し貢献することが望まれる。CBR マトリックスが日本においても有効に活用されることは、その一助になると考える。

【引用文献】

- 1) 高嶺豊, 「CBR ガイドラインによる南インド障害者自助グループプログラムの分析」, リハビリテーション研究, 2012年, No. 152-2012年9月号, 26-31頁
- 2) 上野悦子, 「CBR の変遷と CBR ガイドラインの概要」, リハビリテーション研究, 2012年, No. 152-2012年9月号, 20-25頁
- 3) WHO, <http://www.who.int/disabilities/cbr/guidelines/en/index.html>, (accessed 2013, 10, 10)
- 4) WHO, http://www.who.int/disabilities/cbr/cbr_matrix_11.10.pdf, (accessed 2013, 10, 10)

【参考文献・資料】

- ・(公財) 日本障害者リハビリテーション協会, 「CBR マトリックスを使って考える」(2013年7月13日『CBR 公開研究会 in 名古屋』で配布された冊子), 2013年, P33-36
- ・A 事業所事業概要文書, 2012年
- ・マルコム・ピート, 「CBR 地域に根ざしたりハビリテーション: 障害のある人の完全参加を目指すシステムづくり」, 田口順子監, JANNET (障害分野 NGO 連絡会), 2008年, 明石書店
- ・杉野寿子, 「ヨルダンの障害者福祉と日本の支援: 青年海外協力隊による障害者支援を中心として」, 大分大学大学院福祉社会科学研究所修士論文, 2004年
- ・久野研二・中西由紀子, 「リハビリテーション国際協力入門」, 2004年, 三輪書店
- ・WHO, <http://www.who.int/disabilities/cbr/en/>, (accessed 2013, 10, 1)